

凡日本國中に於て、第一雪の深き國は越後なりと、古昔も今も人のいふ事なり、しかれども、越後に於も、最雪のふかきこと一丈二丈におよぶは、我○鈴木住魚沼郡なり、次に古志郡、次に頸城郡なり、其餘の四郡は、雪のつもる事三郡に比すれば淺し、是を以論すれば、我住魚沼郡は、日本第一に雪の深降所なり、○中さて我鹽澤は、江戸を去ること僅に五十五里なり、直道を量ばなほ近かるべし、雪なき時ならば、健足の人は四日ならば江戸にいたるべし、○中そもそも、我里の元日は、野も山も田圃も里も、平一面の雪に埋り、春を知るべき庭前の梅柳の類も、去年雪の降ざる秋の末に、雪を厭て丸太など立て、繩縛に遇たるまゝ、雪の中にありて、元日の春を恵らず、されば人も三四月にいたらざれば梅花を不見、○下

〔東遊記〕七。不思議。

越後國彌彦の驛より南に入る事五里にて、三条といふ所あり、甚繁華の地なり、此三条の南一里に、如法寺村といふ所あり、此村に自然と地中より火もえ出る家二軒あり、百姓庄右衛門といふ者の家に出る火もつとも大なり、○中其昔はいつのころより出そめしと尋るに、正保二年酉三月、此家にてふいごを吹しことあり、其時ふと地中より出しこのかた、今天明六年丙午の年に至り、百四十二年の間、一日も絶ることなく出るなり、初て出し時に、挽臼をふせしかば、是を取らばもしや絶ることも有べきやと氣遣ひて、此家普請などある時といへども、此挽臼を動かすことなしといへり、誠に數代が間、此家のみ油火を用ることなく、又少しの物をば煮或は焼にも事足りて大なる寶といふべし、○中

一臭水の油は、○中此油灯火に用うるに、松脂の氣ありて甚臭し、故に臭水と名く、灯火の光りは甚明らかなど、油のべること速にして、しかも少し臭氣あれば、價は常の油の半ばかりとぞ、然れども此所より毎日數十斛の油出るゆゑ、此國にては、多く此油を用う、誠に地中より寶のわき